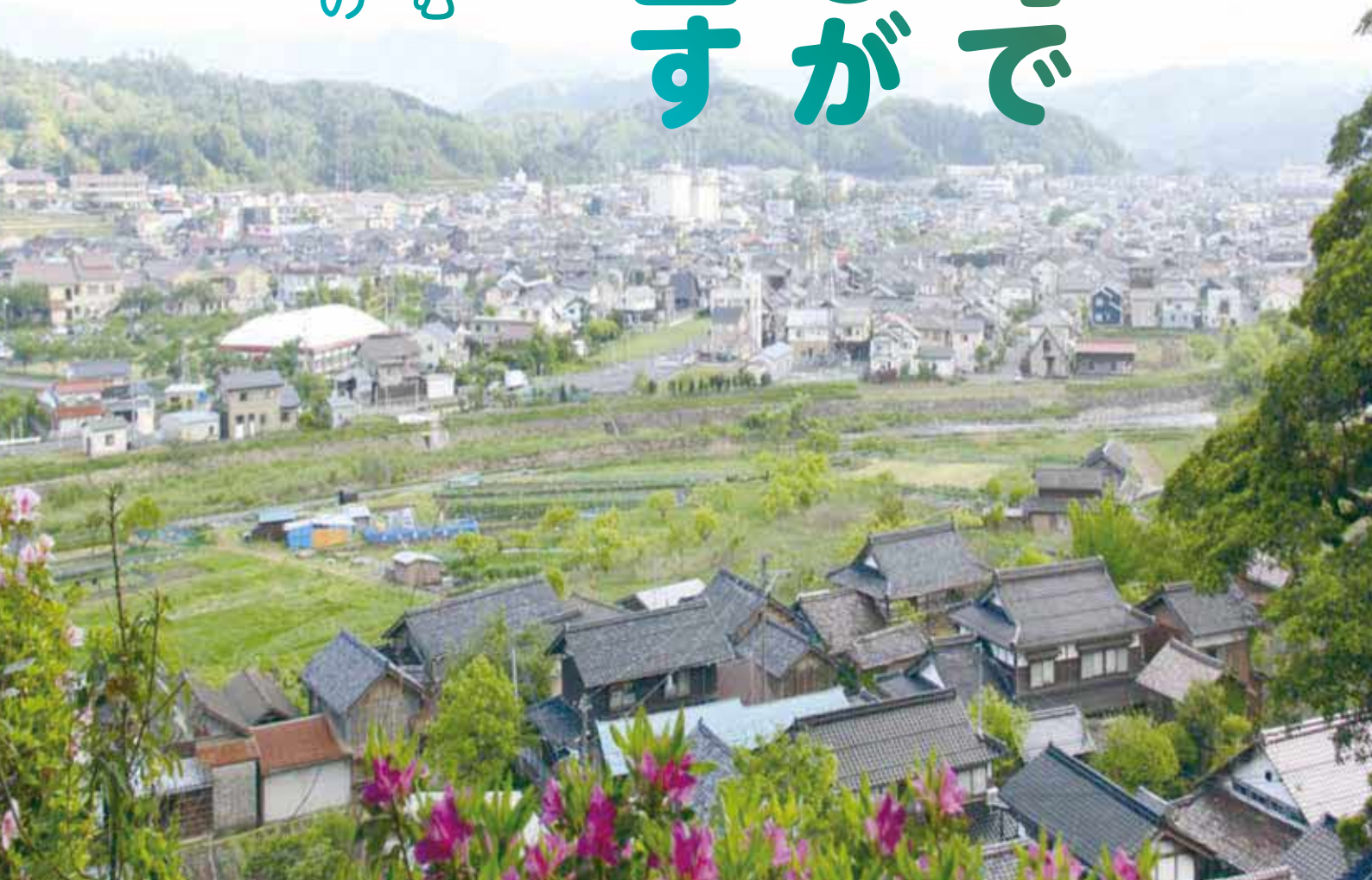


この町で 暮らしが 動き出す 出会いと つながりが育む 新しい暮らしの かたち



全国的に空き家の増加や人口減少が課題となるなか、八頭町でも同様の状況が進んでいます。そうしたなかでいま、「空き家」をきっかけに新たな人の流れや地域とのつながりが生まれつつあります。

町では、移住定住センターを設置し、その運営を一般社団法人 *Yearning for Yazu Project* (ヤーニング・フオー・ヤズ・プロジェクト、略称 YYP) に委託。空き家バンクの運営や住まい探し、地域との橋渡しなど、移住希望者が新たな一歩を踏み出せるようなサポートを行っています。

本特集では、地域との出会いが導いた自分らしい暮らし、空き家バンクをきっかけに理想の暮らしを実現されたご家族の姿、YYP の活動や実際に空き家バンクを利用された方の声を取り上げること、町内外をつなぎながら動き出している新しい暮らしのかたちをご紹介します。



人との出会いが導いた 新たな拠点づくりのかたち

10年以上ほど前から医療・福祉の現場に関わり、「アート・ソネル」という作品を通してリハビリとアートをテーマに創作・研究活動を行ってきたアーティストの大崎さん。八頭町との縁は、恩師のふるさとが町内にあり、里山に土地があることを知ったことがきっかけでした。福祉施設の建設を視野に入れたプロジェクトが持ち上がり、3〜4年前からたびたび八頭町を訪れるようになったそうです。

都会で生まれ育った大崎さんにとって、農業が主産業で、山々に囲まれた八頭町の風景は驚きの連続だったといいます。熊が出ることすら知らず、思いきって山に入ってしまったこともあったとか。

そんな中偶然にも、恩師が所有する土地のすぐ近くで福祉施設を運営する小林さん一家との出会いが、大きな転機となりました。大崎さんたちが取り組もうとしていたプロジェクトに小林さんが共感し、地域の人々とのつながりをつないでくれたのです。

さらにちやうど同じ頃、町では芸術文化交流プラザ「あーとふる八頭」がオープン。芸術文化活動に力を入れようとする流れもあり、大崎さんの想いと重なりました。昨年度は教育委員会事務局からの委託事業として「アーティスト・イン・レジデンス」を実施。町内の民家に滞在した2組のアーティストが、自然や人との交流を通して感じたことを作品として表現し、展示会を開催。大崎さんはそのコーディネーターを務めました。

ターを務めました。

「八頭町に来て小林さん一家があたたかく迎えてくれたことで、自分の心もケアされたように感じた」と語る大崎さん。町に多様な人が関わることで、地域が元気になっていく。アート活動を地域の活動へと広げていきたいという思いから、昨年、新たに労働者協同組合「Barrier House Project > YANU」バリアハウスプロジェクトヤズ」を建築家と立ち上げました。



八頭町への移住を決意した大崎さん



アーティスト・イン・レジデンス展示会の様子



交流した地域の方も展示会を見に来てくれました

「自分の思い描くことは、すぐに実現できるものではない。長い時間をかけ、地域に溶け込んで初めて形になっていくものだと思う」と大崎さんは言います。一つの場所にこだわらず、二拠点生活という柔軟な形での関わり方を模索しながら、今年7月、正式に八頭町への移住を決意しました。これからは、福祉・医療・文化を融合させることで、町全体の活性化を目指していくと話します。

八頭町の魅力は？と尋ねると、「自然の豊かさはもちろん、出会う人の一人ひとりが、その魅力を感じる人が多い」と即答。歴史的にも多くの文化人を輩出している八頭町には、興味深い背景があるといえます。

都会での暮らしから自然の中へ身を置くことは、「非日常の世界に入るような感覚」と大崎さん。田舎暮らしには不便な面もありますが、それを経験することで自分自身を見つめ直し、新たな創造につながるはず。これから移住を考える人たちへ、大崎さんはそんなメッセージを送ってくれました。



小林さんが行うカフェで地域の人と交流（撮影 田中良子）